小学校

光村ポケット生活

わたしの実践アイデア



きゅうしょくクエスト たんけんたい

実践 File vol.5

横浜市立二俣川小学校
篠原理恵先生のご実践から

1年　内容（1）「学校と生活」
1年　内容（9）「自分の成長」

LINE公式アカウント友だち募集中!
授業づくりに役立つ情報を、
いち早くお届けします。

光村図書

教授用資料　本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

「きゅうしょくクエストたんけんたい」(1年)

横浜市立二俣川小学校　教諭　篠原理恵

子どもたちの資質・能力を伸ばしていくためには、子どもの実態や伸ばしたい力を整理したうえで、そのための手立てを柔軟に考えることが大切です。子どもたちにとって特に身近な「給食」に焦点をあて、カリキュラム・マネジメントや活動方法を工夫した実践をもとに、子どもが自己肯定感を高めながら学びを深めていくためのヒントをご紹介します。

活動の流れ　実施時期　10月～12月 | 時数　17時間＋常時活動 | 内容 (1)「学校と生活」・(9)「自分の成長」

小単元名	時数	学習活動
目ざせ！"最高のお弟子さん"！	10	・自分と給食との関わり方を振り返る。 ・栄養教諭や調理員、給食室について調べる。 ・弟子入り体験をする。
たんけんだ！　"最高の給食"！	5	・栄養教諭や調理員が、どんな思いで給食に携わっているのかを知る。 ・活動をもとに「食」に対する自分の関わり方を振り返る。
目ざせ！"もっと最高のお弟子さん"!	2	・" もっと最高のお弟子さん " になるためにできることを考える。

アイデア1

単元構成の工夫

いっそうの育ちを促す柔軟なカリマネ

「栄養教諭や給食調理員」を学習材とした新たな単元づくりのきっかけとなったのは、入学後半年が経った児童の「誰が調理員さんかわからない。」というつぶやきでした。

入学直後の学校探検では用務員と深く関わり、内容(1)で目ざす資質・能力の育ちは見られていましたが、以下の理由から、本単元を構想することとしました。

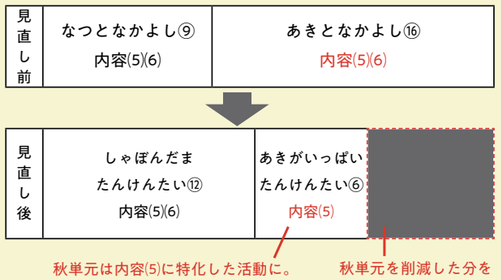
①給食は子どもにとって学校生活の大きな要素であり、給食に前向きに関わることで、学校生活への意欲や、自らの生活を豊かにしようとする態度の育成につながるため

②「魚が苦手だったけど、給食がおいしくて家でも食べられるようになった」といった、食にまつわる自分の変化に目を向ける児童の姿があり、(9)「自分の成長」にもつなげられると考えたため

③本校の栄養教諭や給食調理員が魅力的で、子どもの学びに対して理解が深く、協力的であったため

入学後半年が経ち、学び方が定着してきた時期だからこそ、給食に携わる人の仕事や役割に気づき、学びを深められるのではないかという見通しがありました。

新たな単元の立ち上げのためには、カリキュラムの組み替えが必要です。本単元を実施した際に他の内容の資質・能力の育成に必要な時間が不足しないよう、重複している内容や細かい時数を調整しました（下図参照）。調整時には、「組み替えても内容項目を網羅できているか」「調整した単元で、資質・能力を育成できるか」という二点を、複数の職員の目で確認しました。



本単元の立ち上げのため、季節単元の内容を大きく見直した。秋の活動は内容(5)を中心に構成し、夏の活動で内容(6)の資質・能力を育むことができるよう活動を再検討した。残りの不足分は、内容(9)を扱った成長単元を含め、他単元の時数を細かく調整して捻出した。

アイデア2

活動方法の工夫

体験活動と調査活動をハイブリッドに

本単元では、体験活動と調査活動を並行させることを大切にしました。複数の活動を設定することで、学習材と関わる時間を保障し、気づきの質を高めることを意図したためです。

体験活動「弟子入りタイム」の発端は、「野菜の皮むきを手伝ってほしい」という、栄養教諭からの依頼でした。玉ねぎやにんじんの皮むきなど、実際の給食調理の一部分を担うことで、調理員の仕事を追体験できるようにしたほか、「プチ弟子入りタイム」として、教室前のホワイトボードに毎日の献立を書くという仕事を子どもたちに任せ、意欲が高まるよう促しました。

調査活動「給食はてな調べ」では、調理員の「プロの技」や仕事の様子を充分に見られるよう、環境構成の工夫を行いました（下写真参照）。子どもたちは、一生懸命に給食室の中を覗いたり、栄養教諭へ窓越しにインタビューをしたりする中で、たくさんの発見や疑問を集めていきました。


「弟子入りタイム」の活動。にんじんの皮むきをしている。


自分たちが皮をむいたにんじんを給食室に運ぶ子どもたち。にんじんは、実際の給食に使われた。


外から給食室を覗く様子。いつでも自由に給食室の中を見られるように、窓の下に踏み台を置いている。

体験と調査を日常に組み込むことにより、子どもたちはどっぷりと活動に浸ることができました。「こんなに給食のことを知っている１年生は他にいない。」と自分たちの活動に手応えを感じているようでした。


聞きたいことをノートに書いて窓越しに見せると、中にいる栄養教諭が質問に答えてくれる。

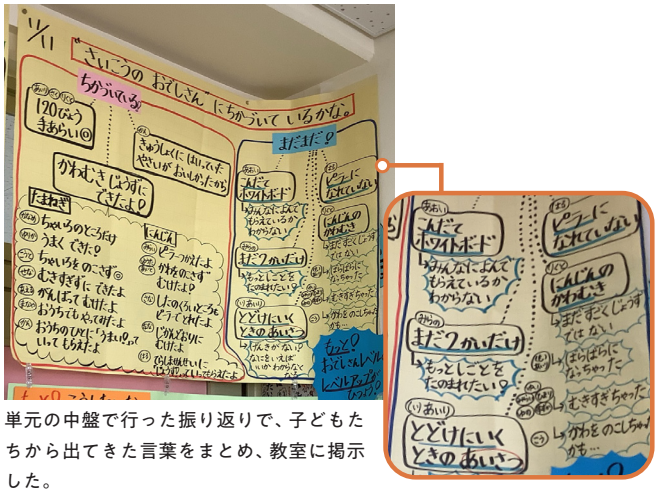

活動が進むにつれ、給食に対する子どもたちの姿の変容が見られた。

アイデア 3

板書・掲示物の工夫

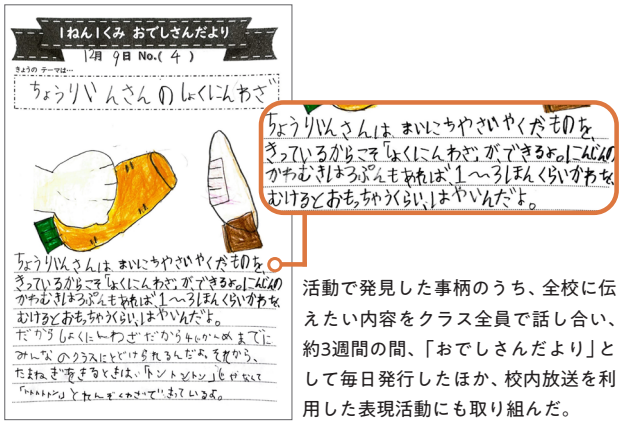
気づきの整理・可視化が豊かな表現につながる

子どもの学習材に対する見方を深めていくためには、体験活動と調査活動に充分な時間を確保するだけでなく、生まれた気づきを関連づけ、次につなげていくことが必要です。そのため、体験活動・調査活動の後にクラス全体で気づきを共有したり、活動中に少人数で交流をしたりする時間をこまめに設定したうえで、それらを板書や掲示物で整理・可視化するようにしました。これにより、体験活動・調査活動と表現活動の往還が生まれ、振り返りの言葉も豊かになっていきました。



単元の中盤で行った振り返りで、子どもたちから出てきた言葉をまとめ、教室に掲示した。

給食に携わる人と繰り返し関わる中で、「この"はてな"は、ぼくたちしか知らないはず。」と自信を深めるとともに、栄養教諭や給食調理員一人一人の人柄やあたたかさ、「自分たちのために徹底した衛生管理をしているのだ」ということに気づいていった子どもたち。次第に「自分たちが発見したことを全校のみんなにも伝えて、もっと給食を大切にする学校にしたい。」という思いをもち始めました。自分たちの生活を支えてくれている人たちへの尊敬のまなざしや感謝の気持ちの高まりが、「お弟子さんだより」をはじめとする表現活動へつながっていきました。



活動で発見した事柄のうち、全校に伝えたい内容をクラス全員で話し合い、約3週間の間、「おでしさんだより」として毎日発行したほか、校内放送を利用した表現活動にも取り組んだ。

教科書にはこんな工夫も

教科書には、生活科の学びを支える工夫が満載。
ここでは、編集部が特におすすめしたいポイントをご紹介します。

●スモールステップで、言語化を促す

すべての単元の終わりに、振り返りのページを設定しています。
①対話の中で振り返る　②自分の言葉で表現する　という二つのステップを踏むことで、子どもが活動を通して感じた思いや学びを無理なく自覚化することができます。



▲上巻 p28「いちばんの はっけんは なにかな」

光村図書

教授用資料
発行者 吉田直樹
発行所 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話:03-3493-2111(代表)

光村図書ウェブサイト
光村図書